はじめに

アルメニアについて語ろうとすれば、避けて通れない言説がある。それは、「緩衝地帯」「ジェノサイド」「交易の民」だ。

アルメニアという民族と社会は、大国の干渉・侵略、離散という絶え間ない政治変動に翻弄されてきた。アルメニア人の歴史家ブルヌティアンのアルメニア民族の通史はそうした史実を余すところなく描いている。同書は邦訳にして本文四五〇頁、巻末年表三〇頁の大著である。[*1]

有史以来の二〇〇〇年以上の間、アルメニアの置かれていた立ち位置は、次々と勃興する帝国のはざまにあった。ローマとパルティア、ササン朝とビザンツ、ビザンツとアッバース朝、神聖ローマとイル・ハン国、サファヴィー朝とオスマン帝国、オスマン帝国とロシア、ロシアと西欧列強諸国……。アルメニアはこれらの大国が引き起こす緊張と対立と紛争の緩衝地帯となり、その均衡が破れるや侵略を受け、侵略の挙句に離散や虐殺という運命に追い込まれた。そのことが同書の「年表」には淡々と記されている。紀元前四〇〇～三〇〇年の間には、「自治」「独立」を果たし、紀元前八〇年頃には最大版図を得るが、数世紀も持続することはなく

短命に終わった。アルメニアが実質的な独立を果たしたのは一九九一年、わずか三〇年前のことである。

アルメニアについての重要な言説は「ジェノサイド」だ。この用語自体は二〇世紀半ばから使われ始めたのだが、[*2] ジェノサイドの実態は紀元前後から発生している。一九世紀以降に限っても、少なくとも三度、一八九五～一八九六年、一九〇九年、一九一五～一九二二年に民族の虐殺が発生しているが、今もなお実態の解明は不十分である。[*3]

ジェノサイドとは集団虐殺に限らない。ライフ・ベース、つまり食料・水・住居のインフラをはじめ、移動、定住、家族、職業、信仰……人びとが生存の基盤とするあらゆる自由を絶たれることである。そうした歴史的な悲劇はアルメニアだけではなく二一世紀の今日もなお、世界のあちこちで繰り返されている。その惨状たるや、地域や民族を問わず、新たなジェノサイドの時代ではないかと思わされる。

ジェノサイドから逃れる手段の一つは民族の分散逃避であるが、それは難民となり離散（ディアスポラ）という結果をもたらす。正確に言えば、離散は結果ではなくして、その前後に「いかに生き抜こうとしているか」という意思と、「どう生き抜いてきたか」という現実がある。

本書の主たる関心は、干渉や侵略や虐殺という政治・社会状況の直接的な実態の解明ではない。アルメニアの人びとが「いかに生き抜こうとし、生き抜いてきたか」という営為を、「アジアへの離散と交易」という史実の視点から描くことにある。

当然のことだが、離散アルメニア人の実態を網羅的に紹介することは難しい。

本書は、筆者がアジア各地で出会った人びとへのインタヴューと、さまざまな歴史遺跡、関係史料にもとづく現場確認、「フィールドワーク」から得られた成果の一端である。

二〇〇〇年頃から、筆者はベンガル湾沿岸域のインドのコルカタ（旧カルカッタ）を中心に、チェンナイ（旧マドラス）、バングラデシュのダカ（旧ダッカ）、ミャンマー（旧ビルマ）のヤンゴン（旧ラングーン）、シンガポール、マレーシアのマラッカ、ペナンなどの港町でアルメニア商人についての史料収集と墓碑調査を行ってきた。[*4] インド・東南アジアのアルメニア人のコミュニティについては史料も情報も少なく、あっても断片的で、在留アルメニア人の関係者もなかなか現れず、調査は困難を極めた。

しかし、調査を進めてゆく中で新たな事実が明らかになってきた。数少ないアルメニア人コミュニティの中で、香港（ホンコン）で事業を興し、アジアのアルメニア人救済者として敬われ、後にはアルメニア人として初めて「サー」の称号を授与された実業家ポール・チャターや、一八六〇年代から海運、海上保険、炭鉱業など手広く事業を営んでいたアプカー一族などが、旧カルカッ

タに拠点を置いていたことなど、さまざまな事実が断片的ながら浮かび上がってきた。

かつてイギリスの植民地領であった旧カルカッタは、アジアにおけるアルメニアン・コミュニティの「拠り所」であった。現地のインド人はほとんど気付かないのだが、今もなお同市の下町、安宿が軒を連ねているサダル通り近くには、入り口に「アルメニアン・カレッジ」と大書されたゲートがある。周囲は高い塀で囲まれ、ゲートでは複数の警備員による厳しいチェックが行われていて、外部からの訪問者をよせ付けない。筆者は幾度となくこの施設に通い、電話をかけ、訪問の趣旨を伝え、一週間後にようやく扉が開いた。中は二万平方メートルもあろうか、幾棟かの建屋と運動場があり、一〇〇人ほどの若いアルメニア人の男女が生き生きと生活していた。

数回の訪問の後、やっとのことでその責任者であるアルメニア人、ソーニア女史の信頼を得て、彼女の紹介でコルカタ市内のアルメニア人施設や教会や墓地、さらには同市北部のチンスラー、バングラデシュの首都ダカのアルメニア教会と管理人を次々と訪ねることができた。

しばらく通ううちに、コルカタの南・北の郊外にも高い塀に囲まれたアルメニア人の関係施設があることを知った。それらの区画内には管理事務所のほかに、生活施設や学校、養護院、教会、墓地なども併設されていて、老人や壮年のアルメニア人がともに生活している施設もあ

った。ここには、周囲のインド世界とは全く隔絶した「アルメニアン・アジール」ともいえる空気が充満しており、南アジア在住のアルメニア人の安息の場であることが伝わってきた。

帰国後、筆者はアルメニア友好団体の関係者や居留地研究者の案内で、横浜山手外国人墓地や神戸市立外国人墓地にはアプカーやほかのアルメニア人の墓碑が残っていることを知った。

幕末・維新期の当初に、旧居留地にアルメニア商人が到来したことも明らかになった。改めて函館、横浜、神戸、長崎の旧居留地や外国人墓地、彼らが商会を置いた大阪や門司（もじ）の市内、居留地外国人の保養施設があった神戸、その西郊の舞子、塩屋、北郊の有馬など旧跡を訪ね回り、史料をしらみつぶしに当たった。

その結果、函館の居留地関係史料にはアルメニア人らしい人名も墓碑も見当たらないことが判明した。だが、ほかの居留地では商会や海運会社、ホテルなどアルメニア商人関係の史料が次々と現れた。

ところで、アルメニアという国名やアルメニア人という民族名は、我々日本人の認識からは遠く、深く理解されることはほとんどなかった。インドで活躍していたアルメニア人が、南シナ海、東シナ海を経て、やがて中国や日本にまでやってきたという事実も知られることはなか

った。

近世のユーラシア大陸では、アルメニア商人は「陸の巡回商人」として活躍していた。そうした史実は第1章で紹介するように、これまで海外の研究でかなり明らかになっている。しかし、近代になると彼らが「海の商人」に変貌し、インド・東南アジアを経て東アジアにまで到来したという史実はほとんど明らかにされてこなかった。では「陸の巡回商人」が「海の商人」に転身した背景には何があったのだろうか。

筆者の関心は近代の国際交易史にはない。小民族であるアルメニア人の移動に関わる動機や背景、海域での交易活動や彼らの交易圏の広がり、そして、彼らを結びつける「ネットワーク」、彼らの拠り所（アイデンティティー）、そしてアルメニア海商とイギリスやフランスなど強大な海洋帝国との関わりがテーマなのである。

本書におけるアルメニア商人の交易の主な舞台は、近代におけるベンガル湾からマラッカ海峡、日本に至る海域世界である。彼らの活動は実は香港や上海（シャンハイ）、厦門（アモイ）などの中国各地、ウラジオストックなどにも及んでいた。そのことは「チャイナ・ディレクトリー」や「チャイニー

ズ・レポジトリー」などの記事から断片的にうかがえる。しかしながら、これらの地域での史料収集や現地調査の機会がなかなか得られず、しかも政情の変動などでここ十数年の間、調査のめどは立たず、ついに断念せざるを得なかった。中国におけるアルメニア商人の活動については、極めて重要なテーマなのだが、史実検証を今後の研究に俟たざるを得ない。

近代アジア、特に南アジアから東アジア一帯のアルメニア商人の実態については、一般書はもちろん国内外の専門研究でさえも多くはない。本書はいわばその端緒、出発点である。アルメニア人による最新の研究を取り上げつつ、本書の内容に関連する一般向けの邦語文献や翻訳書もできるだけ紹介しておきたい。

それでも史料の欠如や論証の不十分な点があるだろう。それはひとえに筆者の責任である。今後の研究の深まりの中で補足修訂していただきたい。

なお、本書では次の点に留意した。

1　歴史的用語や人名・事件名は、基本的に邦語表記とした。
2　本文での人名・地名は、基本的に近代の表記とした。
3　本書では、「離散アルメニア人」と「在外アルメニア人」という用語・概念を使い分ける。

4　文献を参照した箇所には註番号を付して、各章末に一括してまとめた。

註

＊1　ジョージ・ブルヌティアン著、小牧昌平監訳、渡辺大作訳『アルメニア人の歴史――古代から現代まで』藤原書店、二〇一六年。原書：George A. Bournoutian, *A Concise History of the Armenian People: from Ancient Times to the Present*, Mazda Publishers, 2012

＊2　一九四八年一二月九日の国際連合総会において採択された条約によって初めて承認された「国際的な犯罪」。一九四四年にユダヤ系ポーランド人ラファエル・レムキンによって提唱された用語・概念である。主としてホロコーストがユダヤ人に対する、ジェノサイドがアルメニア人に対する民族抹殺を含意したが、今日ではより広くさまざまな民族集団に対する非人道的な犯罪を意味する概念として用いられている。

＊3　松村高夫・矢野久編著『大量虐殺の社会史――戦慄の20世紀』ミネルヴァ書房、二〇〇七年、第一章「トルコにおけるアルメニア人虐殺（一九一五～一六年）」。

＊4　重松伸司『ベンガル湾海域文明圏の研究――アルメニアン・コミュニティの社会組織とその活動』〈調査研究基礎資料〉、「海域学」プロジェクト関連事業成果報告書、立教大学アジア地域研究所、二〇一四年六月（未公刊）。